

## ハイデガーにおける〈道具分析〉と〈技術論〉

河上正秀

ハイデガーの後期思想圏に属する技術論を考察するときに、つねにそこへと帰るべき領域、そこへと帰ることによって技術問題の奥行きが改めてより輪郭を鮮明にしてくれる領域がある。それは『存在と時間』における周知の道具分析の領域である。本稿はこの道具分析が有している問題性を整理・検討し、後期の技術論との比較と連関の所在を示すことに焦点をおく。かかる両者の論述上の差異面と同一面が、ハイデガー自身の思想全体の一断面を告げているともいえる。

まずわれわれが目留めざるをえないのは道具と技術といった場合のその語のハイデガーが与えるニュアンスである。『技術への問い』の冒頭においてハイデガーは道具問題をあたかも一蹴したかのように、技術への問いが「技術の本質」への問いであって、いかなる「技術的なもの」へのそれではないと明言している。ここで「技術的なもの」とは、彼自身が拘泥するようには明らかに道具の類いの意味で解されており、目的に対する

「手段」とわれわれが考えるものをさす。しかし彼は、技術が道具である一般の見地が「無気味なほど正当である」(「*WA*」s. 11)<sup>1)</sup>ことをどこまでも認めつゝ、「正当なもの必ずしも真なるものではない」(ibid.)として技術そのものの本質領域へと踏み出そうとする。「正当なもの」から「真理」としての技術の本質への熟考(*Beinung*)の途へと深化される。

しかしながら『存在と時間』における道具分析の詳細を知るべき、すでにそこに技術論の思想の枠が用意されていたように見える。それは道具的領野が単に葬むられたのではなく、そこに発端を有した独自の思想的原型が秘んでいると見る必要がある。そうした技術論への予兆に当たるのが道具分析であったと想定されうる。しかしそれにも拘らず道具が技術へと移行する必然性も明らかに存在していたはずである。それはいかなるものであったのか。敢えていえば道具が技術へと思想的に昇華せざるをえない事情も考慮しないわけにはいかない。以上のように

なハイデガーの技術論を考える上で不可欠の一里程として道具問題が横たわっているものであり、両者の接点で生じる同一と差異の両面について以下論述する。

## 一

道具分析はまず世界内存在としての現存在の意味と解明に触れて定位された。現存在が一般的に世界内存在として、「世界のうちにおけるかつ内世界的な (innerweltlich) 存在者」との交渉 (Umgang) (S. Z. s. 67) に時を費やし、かかる交渉のあるいは「配慮 (Besorgen)」のうちに出会っているはずの存在者は道具に他ならないからである。道具分析はその意味で現存在の世界内存在としてのあり方を現象学的に探求するための一過程であるといつてよい。すでにその道具分析に移る前で、世界内存在の世界とは「その中で、事実的な現存在が現存在として〈生き〉ているところのもの」、いいかえれば現存在がそこに実在する或る種の場所だと理解されている (S. Z. s. 68)。しかもこの世界という概念は、あたかもそれは物が「手前 (vor-handen)」あるかのような事物の総称ではない、すなわち「世界帰属的 (weltzugehörig)」ないし「内世界的」なものではない (ibid.)。かかる現存在の世界内存在としての実存論的規定のうちすでに近代的認識論批判というハイデガーの意図するところを見出すことができるし、「世界」とは存在論的には、本質的に現存在ではない、存在者の規定ではなく現存在

そのものの「一性格である」(S. Z. s. 64) という明確な叙述もまた理解できるのである。世界をデカルト的 Res extensa として規定することへの警戒について敢えて詳述していること (S. Z. s. 65) にそのことの証左もある。かかる手順の背景には、くり返していえば現存在がその中で生存する場所としての世界への探究における実存的な実践態が戦略的に構想されているといえるのである。そしてこのことは、世界とは現存在の「一性格である」という実存論的命題が「現存在の最も身近なあり方である平均的日常性の地平 (S. Z. s. 22) における道具分析を通していかに補充されうるかを問う中でより一層具象化される運びになっている。

まず世界における交渉の日常的なあり方が問われる。交渉はすでに認識ならぬ「仕事をしつ、〈道具〉を使用しつ、配慮すること」(S. Z. s. 67) に他ならない。かかる配慮の中で出会うれる道具のあり方を現象学的な特異な置換によって「手許存在 (Zuhandensein)」と命名し、他方で認識に見合う述定的な物に様態をさす「手前存在 (Vorhandensein)」との明確な区分においたことは周知のところである。通例の言いまわしにある「手の延長」としての道具の規定が手の如く、意のままにある道具の手許性をよく伝える。道具にはそれ固有の「認識」があること、単に現存在の手前に出現しているようにあるのではなく、「自体に・おいて・あること (An-sich-sein)」が該当している。鉄槌によって槌打つのは、この道具の使用の最中であってそれが隠れてあること、またそうである時ほど交渉が首尾よくいっ

ているということである。ここにすでにして理論知に対する実践知の優位という戦略が指摘されている。使用中の道具が手先にあつて隠れるということはこの実践が何か盲目的の状態、視の欠如といった事柄をさすのではなく、それ固有の視を含む実践知だからである。「さしあたり手許にあるものの固有な面は、その手許性のうちにいわば自身を収斂し、こうしてまさに本来的に手許にあるということである。」(S.Z.s.69) 道具としての手許存在への考察の重要な一点がここにある。すなわち何よりも道具は手許存在として現存在の実践態という第一次性を告知する点である。

さらにこのような現存在の実践態における使用という交渉のうちには「:の・ため(Umsu)」(S.Z.s.68)というあり方が構造的に貫徹している。いいかえれば有用性、寄与性、使用可能性、便利性といった「:の・ため」の多様なあり方が本質的に付随する。道具とは本質的に「:ののための或るもの(Ding als Umsu)」として現出するからである。道具が手段といわれるゆえんであるが、ハイデガーはそのことよつて道具の各個性を意味させているのではない。むしろこの「:の・ため」の構造は各個別的道具の連関性を言い当てている。道具が「道具立て全体性(Zeuganzheit)」(ibid.)の謂であるがゆえに、この全体性を構成するところの「:の・ため」も成立する。この全体性がまず道具の各個性性に先立つて発見される、逆にいえば全体性のもつて初めて各個性性が自身を示すということである。しかしこの道具の全体性を構成する「:の・ため」という

使用可能性の構造の中には「或るものの他の或るものへの指示(Verweisung)」(ibid.)が含意されているのであり、各個別的道具の連鎖・連関が当然想定されねばならない。ペン、インク、用紙等々といった場合に各個体は相互に各々の他のものへの帰属性(Zugehörigkeit)のうちにありと同時に、各々の個別体のあいだでこの指示の連関に配置されている。それゆえ道具の全体性は「:の・ため」という使用可能性と指示連関とをその根底においてもつ。

かかる道具全体性の使用可能性と指示連関のもとでは世界を構成すると考えうるかぎりでのあらゆる非現存在的存在者が包摂されうる。いわゆる自然もまた材料(Material)としては使用と指示の条件を免れるものではない。「森は営林であり、山は石切り場であり、川は水力であり、風は(帆船をはらむ)風なのである。発見された(環境世界)とともに出会われるのは、こうして発見された(自然)である。手許にあるものとしてあるそれらの存在のあり方を度外視するならば、自然そのものもつばら純粹な手前性において発見され規定されることとなるほかない。」(S.Z.s.70) 自然がこのように道具的手許性において現象学的に了解されている点に注目しておく必要がある。問題は後述に譲ることにして、とりあえず世界への立間際にして現存在の環境世界への配慮のうちに自然がかかる理解を受けている点が『存在と時間』において特徴的である。自然が材料として使用と指示の条件にあるばかりではない。いわゆる製作物もまたそれと同一の意味において、作業場の「単純手工

業的狀態」のうちで着用者や利用者への指示性を有している。製作物が手許にあるということは、このように使用者への指示において、彼が生きている世界と出会っている。かくて自然的世界であれ人間の世界であれ、いずれにせよかかる世界の中で存在者一般は、「自体に・おいて・あること」として手許存在として存在論的規定をうけているのである。くり返さずなら、手許性こそが「粹粋な手前性に対して根源的である」(S. Z. s. 22)からである。そのことは、あらかじめ存在者一般が理論的・認識論的に手前存在として理解されうると仮定する図式を拒ける、むしろ却って「認識することは、配慮のうちで手許にあるものを經由して初めてようやく手前にあるものの露出へと進攻する」(S. Z. s. 71)というべきなのである。

以上において道具のもつ手許性が存在者一般を内世界的に見する存在論的道筋であることが明示されるが、だからといって「このような存在者を接合しても総和的に何かへ世界」のよくな或るものが生じることにはならない」(S. Z. s. 72)といわれる。あるいは「世界は手許にあるものから「成立」しているのではない」(S. Z. s. 75)ともいいかえられてくる。「接合(Zusammenfügung)」も「成立する(bestehen)」もそのいずれもが世界内部的な存在様態であって、世界の世界性の規定を充足するものではない。道具がむしろ使用不可能なものとなる、すなわち道具の欠損といった事態が生じた場合にはどのようにこの世界概念が捉えられるべきか。道具の欠損が仮りに世界の構成の単に破れとするならば、そのとき世界が部分的にも無世

界的なものを露呈することになるが、そうではなく、ハイデガーは道具の欠損は却って世界を現出させる場所であるという特異の迂路を道具分析に課するのである。道具が使用不能のもの、用途不能のものとして出会われる場合には、それが却ってその損傷にあつて「目立つもの(Auffallen)」(S. Z. s. 73)になり、道具が手許に無く、不在である場合には、そのことが却って「押し迫るもの(Aufdringlichkeit)」(ibid.)を現存在に与えることになり、さらには道具が片づけられないで場違いの様相を帯びたものとして横たわっている場合には、「手向かうもの(Aufsässigkeit)」(S. Z. s. 74)としてそれが映るほかないが、そのようにして道具がそれ本来の手許性を離れ、用をなさなくなるのは、その事態が道具を単なる物として手前的に客観的に見えさせているにはちがいないにせよ、欠損の最中であつて「たとえ非主観的にせよ、手許性ということが理解されている」(ibid.)ことになる。手許的道具が欠如的であるということは、その「無し」という事態によつて却つて道具のもつ存在性(手許性)を開示してくるといふ逆説であり、「変容」であり、「さしあたり手許にあるものの存在の積極的な現象的性格」(S. Z. s. 75)である。

かかる道具分析の迂路によつて示されるのは、道具が手許にあつて使用の最中には見えざるものが見えうるようになること、つまり道具のもつ指示連関や「…のため」の全体性、さらにはこの全体性と共なる「世界」が見えうるようになることである。簡略にいえば、道具の手許性の基底に潜在している「世

界」が開示されてくるということである。「道具連関は、いまだ決して見られたことのないものとしてではなく、配視のうちにはたえず前もって看取された全体として閃いている。だがこのような全体と共に世界が己れを告げるのである。」(Ibid.)この指示全体性に関連して「記号」(信号、旗など)が有意義となるが、これも或る特定のいちいちの事物との対応関係において記号だからではなく、「道具全体を明らかに配視のうちへと引き上げ、その結果としてそのことと一緒に手許にあるものの世界適合性(Weltanpassigkeit)が己れを告げる道具」(S. Z. s. 80 筆者傍点)に他ならないからである。逆にいえば、こうした道具全体性、各道具がそれに適合する「世界」があればこそ、各道具が適性をもっているものとしてあるかないか、使用可能か不可能かということも成立する。それゆえ道具はつねにすでに指示づけされたもの、各々の場所でそれにふさわしい「適所性(Bewandnis)」を備えられてあるということが可能になる。

鉄槌は打つという適所性、また或る物質を固定する適所性、さらには固定は風雨に対する防衛のそれ、といったことが含意されている。しかし窮局的には、この道具の適所性の赴むところ、他ならぬ現存在がその下で庇護される場所、すなわち現存在自身の「存在の可能性の・ため」(S. Z. s. 84)と(づ)う(づ)うに帰着せざるをえない。すなわち適所性をなす道具全体性は、適所性には決して帰属することがあり、えぬが、しかしそれに基づいてのみ道具の適所性もあるはずの人間の現存在、世界内存在としての現存在に還元されていく。今や世界の世界性とは、

この現存在が自らの存在の体制のために、付着させているところのものであることが明らかになるのである。「自己指示的な了解がそのうちでなされる場が、それは存在者を適所性という存在様式において出会わせる場でもあるのだが、それが世界という現象なのである。そして現存在がそれに基づいて自らを指示するその当のものの構造、それが世界の世界性をなすものである。」(S. Z. s. 86)

かくて世界という概念は、それ自体で現存在から隔離した客観的な存在を意味せず、現存在につねにすでに付着したその根拠といつてよい実存論的構造を有しているということになる。「世界とは、現存在が〈そのうちに〉存在者としてそのつどすであつたところの或るものである」(S. N. s. 76)のはかかる事情による。かかる世界のうちに現存在がつねに差し向けられており、あたかも世界に自らを憑依するかのようにならんと慣れ親しみのうちにあるがゆえに、世界はもっぱら現存在のあり方との一体的関係構造をなしており、またそれは現存在の生きる場そのものであり、さらにはそれは現存在の実践的活動一般を可能にする道具的指示連関の全体性に他ならないのである。

## 二

以上によって『存在と時間』に基づく道具分析の要約をしたのであるが、これを後期における『技術への問い』の技術問題

との比較に付した場合どのような同一面と差異面が見出しうるであろうか。問題の所在が重層的な関係をなすところから必ずしも論点を体系的に整理しがたい憾みも否めぬことを承知の上で、所在を明確化するための手続きとして以下若干の諸論点に基づいて叙述しておきたい。

まず初めにもっとも基本的な問題としての道具的交渉に特有な実践性に関してである。すでに提起された手許性の実存論的規定は手前性との区別立てに従って現象学的に浮上した突出的象徴であるが、それ自体で現存在の実践態を意味する。手許性と手前性による道具的存在者の区別立てそのものがずでにして実践知と理論知との対比の上で成立する事柄であったからである。それによって理論知に対する実践知の優位性ということも確定された。この実践知の優勢的把握は、後の技術論においても一貫するテーマであることをここで改めてわれわれは確認することができる。すなわち技術が科学に優位するという技術論におけるハイデガーのテーゼを指摘することができる。そこでは明確に現代的技術の相のもとで技術の内実が思索されており、その限りでは道具という手工的レベルをはるかに超えた視点が配されているが、ギリシア的な「真理」の語を「露呈」と解する立場を通じて技術もまたこの「露呈」の一環であるとし、それが自然と人間をとともども「挑発」と「仕立て」の渦に巻きこむ構造をハイデガーは描出する。単なる人間的行為の実践態を超えているとはいえず、そこでも技術の相の下での自然との関わりにおける人間の実践の様態がとり押さえられているこ

と、「挑発」「仕立て」のうちで、「開発、変容、貯蔵、配分、転配」(V. A. s. 20)とらった活動的境位が技術の現場になっていることがすべての基盤に定位されているのである。また技術が科学に優位するとは、「史実的(Historisch)」と「歴史的(Geschichtlich)」との区別立てに絡んでハイデガー特有の歴史観に触れる。すなわち近代技術は近代科学による落とし子、つまり応用科学ではなく、技術の存在史的経験に照らすなら近代技術こそ近代科学の生みの親だとする議論が前提になっている。「現代技術があなたも応用自然科学であるというような偽瞞の見せかけ」(V. A. s. 27)は、その逆転においてこそ真の存在史の見地を得る。先に述べた手前性という語は『存在と時間』の中でも、ギリシア的な形而上学の枠内においてであれ徹底的に純粹認識に立つ理論知の側に包摂されていたが、それは技術論にあつては同じ理論知としての科学が肩代わりを果すことになる。したがって手許性―手前性は技術―科学の各対比のうちで発展的に解消されていくことをまずもって認めることができる。

しかし反面で、かかる実践態の一貫した同一的方向を認めるとはいえず、『存在と時間』と技術論との実践態の内実上の差異面は否定しがたいものがある。前者にあつて実践が剔出される場合のその寄り所は手前性に対する手許性というどこまでも手をめぐる地点に定置されているのであり、そのことは後者における露呈への仕立ての参画の実践的構図と一線が引かれなければならない。すなわち技術の相のもとでは人間が行為すると

いう人間の主体性の実態が峻拒されたところ、つまり仕立てつ、仕立てられるという能動かつ受動的な相互性の全体としての露呈の方が技術そのものの実態と想定されているからである。それは「人間が主体として或る客体に関わる時にはいつでも通ることになる領野」での出来事、「真事 (das Unverborgene)」（V. A. s. 22）のうちで生起する。すでにそこにかの現存在を起点とする実存論的なパースペクティヴは遮られているといわねばならないのである。

こうした実践態における変移が生じざるをえないのは、もともと技術論の射程の広がり近代以降の「世界のヨーロッパ化」に伴なう視点で構想されたことにもよる。力の支配という技術の論理の貫徹された世界文明がヨーロッパ的なものの所産であり、近代自然科学といえどもこの技術の論理を源泉とする自然の対象化と支配化の一環でしかないという視点である。そこに自然に関するハイデガー独自の見解があるというべきであろう。先の『存在と時間』の自然の解釈はかかる思想的背景を補なう或る必然性を有している。道具が基本的に指示連関のものにあり、その限りで使用上の有用性を条件づけられたと同様、自然もまた或る材料視のもとで指示と有用性を免れえない。森が営林化し、川が水力化されるといったかかる自然の手許化の事態は、現存在の自然に対する有用化の指摘に他ならないが、それは技術論にあつて「用象 (Bestand)」の名で自然一般の把握を可能にしたところのものと適切に重なりを見せる。自然が客観的对象のレベルを超えて技術の相のもとで人間との非独立

的なあり方の中に包括され、それ自体が役立つもの、用立てられたものの象をなすことが含意される。その限りでは手許化された自然は用象化された自然であるという技術論への解消を用語の上で確認してよいのである。

しかし用象の語は、単に自然一般の道具的指示連関における日常の見廻しのうちに出現する事象の説明の上に基礎づけられているのではない。むしろ自然のエネルギー化という技術論的位相において解されるべきものである。エネルギーはアリストテレス的な意味では制作という人為的な可能態・潜勢態 (デュナミス) に関わる領分のみ、制作のみに位置づけられた自然そのものの現実態・顕勢態であつた。建築術も医療も、その活動によつて自然を支配しえず、ひたすら建築や健康という目的に仕え、守るという過程への参画にすぎず、自然はそれとして不可触性を帯びていた。だが技術は近代以降、この潜勢的な制作の領分の逸脱と拡張の中で自然総体を支配化しようとし、可触の手に納めようとする。技術における自然エネルギーとは、かかる古典的な従来のエネルギーとデュナミスとの配置の逆転において、つまりそれとしては隠れた潜勢態に位置づけられる。現代技術の中に統宰する露呈、それは自然に対して、エネルギーそのものとして採掘と貯蔵を可能とするその自然に対してエネルギーを供給せよとの過剰な要求を課す挑発である。(V. A. s. 18) かくに「自然は『存在と時間』における現存在の日常的な使用の具に付す世界の出来事ではない。技術の総体をその本質において捉えた他ならぬ『存在論的な』技

術の場所からの指摘であり、そこに用象性と手許性との差異が明確にあるのである。

以上のような実践態、自然に関する各同一面と差異面を見てきたが、これらにふれてさらに世界概念をめぐるそれら両面性がいかなるものであるかが問われねばならない。

先述した道具分析において道具の欠損という事態は、ハイデガー特有の洞察によって、それが却って道具の有する手許的存在性を顕わすという逆説的な表現で「積極的な現象的性格」を得ることを見た。道具の欠損や損傷が手を休ませる限りにおいてそれは手前性としての観察、認識という場を提供することを了解しつ、それでもなお実践の優位性を基軸にしてこの事態を捉えている。ということとは手前性という地としての理論知が徹底して否定的表現に曝されて初めて手許性という図を浮き立たせていることになり、それがハイデガーの科学的認識の不在という批判を生むものともなっているものでもある。ただこの手前性に対する手許性の優位という基本テーゼが科学に対する技術の優位に変移していったことは既述した通りである。しかし否定的表現であるとはいえず、『存在と時間』の時点でいままおこの手前性の必然的派生については、世界への「配慮の欠陥の様態」(S. Z. s. 73)にも拘らず世界の理論的認識として世界を極度に還元する科学知という独自の領域において扱われていた。ところが技術論のもとでは科学の独自性がほとんど認められず、かの自然が用象と見なされるためもあってか、科学は技術のうち完全に収斂されることになる。敢えていえば科学的対

象性はその対象の有する実体を喪失し、技術的用象性のうちに喰い尽くされる。「対象もまた用象という対象喪失態(das Gegenstandlose)の中へと消尽される。」(V. A. s. 22)

かかる科学の技術への収斂が指摘されるのも、自然を含めておよそ「現実的なもの(das Wirkliche)」と「いづるものを用象として仕立てるべく挑発する「技術の本質」がその背景に設定されることによる。『技術への問い』のパススペクティヴが存在的な「技術的なもの」(例えば道具や機械等々)ではなく何よりも「技術の本質」をめぐる存在論的問いにおかれていたことに注目しておかなければならない。その点では、かの道具分析が手許的な道具を手がかりとして世界の発見にさし向けられる『存在と時間』の方法論との重なりを見ることが出来る。手許的道具が世界の開示のひとつのあり方であり、道具の欠損の迂路が却ってその道具の背後にある世界をかいま見る通路にもなり、最終的に道具連関の全体性が明るみにされると共に世界の世界性も開示される。さらにこの開示された世界とは、「現存在がへそのうちに」存在者としてそのつどすであつたところの或るもの」であると結論されて、現存在の内—存在の仕組みが指摘されるのである。技術論にあってはその仕組みはどのようであるか。それは、用象化された「現実的なもの」を手がかりとして「技術の本質」を明るみにもたらすことであると要約してよいであろう。すなわち「現実と呼ばれるものが用象として露呈される」(V. A. s. 21)ように仕立てるのは「技術の本質」としての「組み立て(Gestalt)」(V. A. s. 23)であり、

その意味では人間もまたこの「組み立て」によって用象化されている。「人材」「臨床例」等のであるが、そうした一切のものを仕立てている「組み立て」が頭わになる仕組みのうちに展開されるのである。しかも最終的に「人間は、このように挑発されたものとして組み立ての本質領域のうち、に立っている」(V. A. s. 27)(筆者傍点)とされ、内一存在の仕組みにおける人間が提示される。

しかし右のような方法論の類似性は認められるにせよ、ここでも内容上の差異面は著しい。その典型例をあげるならば、対象が用象という対象喪失態に収斂され、組み立てが統宰する全技術的構造に対してハイデガーが付与する「命運」「危険」という用語内実である。世界概念がそれ自体で或る種の肯定性的色調を帯びた無害の概念であるのに対して、「命運」「危険」の指摘は、技術への悪魔主義的否認とは別の意味で、用象への仕立て人でしかなくなっているような人間への警告的、否定的烙印が濃厚である。世界が現存在の生きる場であるという中立的空間はそこにはなく、技術の組み立てのもとに人間が閉塞する事態が殊のほか焦点になっている。

### 三

以上のような概略的な二つの時期の用語対比を通じて各々の思想内実の対比を述べてきた。当然のことながらそれら両時期のこうした対比は、同時にハイデガー自身の思想の歴史の変位

ぬきにはありえない。現存在から人間への人間存在の変位に関して推測しても、そこには道具に基づく現存在の世界内存在という実存論的境位の枠ではほとんど納まりえぬ技術の支配力の圧倒的な境位が技術論の中で定位されていることが洞見される。社会学的な見地からしても導びきの糸たる道具が画定された環境世界という手工業的な管為の色調をいかにしてもぬぐいえず、しかもそれに基礎づけられた解釈学的範型を出るものではないという道具分析への烙印は現今の技術論的立場からの批判のうちにはしばしば散見されるところである。技術の本質が組み立てであるというハイデガーの技術論においては、認識的科學が実践的技術の要請に従うという先の科學と技術の存在史的逆転の論理に即していえば、現今常用される「科學技術(科學・技術ではない)」という語に見合う歴史的境位すら読み取りうるように思われる。純粹に靜觀的かつ中立的な科學がありえず、それが動態的かつ非中立的な技術の中に統合されて初めて近代以降の科學史も想定しようとした「世界像の時代」のハイデガーが考慮されるゆえんでもある。それもまた「危険」と目されたところの人の人間の用象化は、すでにして人間の**本質(本性)**すらも生産されつ、あるいわゆる現代の科學技術的水準の予兆とさえいつてよい問題性をはらんでいないだろうか。「人間が最も重要な原料であるがゆえに、今日的な化學研究によっていつの日か人間資材の人工的生殖のための工場が建てられるということが予感される。」(V. A. s. 91)

しかしそれにも拘らず、両時期のかかる差異面をそれとして

支える思想の構造的枠組み自体は両時期間を貫流しているといえる。現存在の世界―内―存在という実存的・実践的な志向的関係の仕組みは、人間が対象としての現実的世界に実践的に呼応しつゝ、技術の本質としての組み立ての中に定位される技術の現象学的全構造の予兆であるかに見える。その意味で道具分析はこのような技術の思想的枠組みを解き明かす鍵でもある。

#### 注

(一) M. Heidegger, Vorträge und Aufsätze, Pfullingen, 1954 (本文中V. Aはすべて当書をよす。)

(二) M. Heidegger, Sein und Zeit, Tübingen, 1967 (本文中S. Zはすべて当書をよす。)

(かわかみ・しょうしゅう 筑波大学哲学・思想学系助教授)